

恵みのうちにコンサートが終わり、いよいよこの年もあと二か月。今日もマルコの福音書を開きます。

1. シモンとアンデレ (1章16節)

- ①ガリラヤ湖 (1:16) ガリラヤ地方にある湖です。縦長のじゃがいも形。長さが21キロ、幅は12キロ。地中海の海面より211メートルも下にあります。淡水湖で、魚が生息しています。新約聖書の時代には、12の大きな町が湖畔近くにありました。カペナウム、テベリヤ、ベッサイダなどが聖書の中によく出てきます。それらの町の主たる産業は漁業でした。この湖を舞台に、イエス・キリストの働きが数々にされました。
- ②シモンとアンデレ (1:16) ここに出てくる「シモン」(「神は聞かれた」という意味)とはイエス・キリストの12弟子のひとりペテロのことです。ペテロの本名です。福音書にはシモンという名前は他にも「クレネ人シモン」とか「魔術師シモン」とかが出てきます。ペテロというのはイエス様がつけられた名前です。「岩」という意味。シモン・ペテロの兄弟がアンデレで、ヨハネの福音書によるとアンデレがシモンをイエスのもとに連れていったとあります(ヨハネ1:42)。
- ③網を打つ漁師 (1:16) シモンとアンデレは漁師で、網を打っていました。イエス・キリストはその時にガリラヤ湖のほとりを通っていたのです。主イエスは、シモンたちが網を打っているのをご覧になりました。私たちにしても、イエスに見ていただくというのは幸いなことです。

2. 人間をとる漁師 (1章17～18節)

- ①わたしについて来なさい (1:17) イエスは彼らに声をかけられました。「わたしについて来なさい」。世の中の力ある人も「俺について来い!」というでしょう。でも、ここでの調子はとても静かな様子です。ご慈愛と恵みと平和に満ちたご様子が想像できます。
- ②人間をとる漁師 (1:17) 「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう」という言葉は、漁師たちに向けて言われているだけに興味深いです。漁師たちは、魚をとる方法、技術、知識を持っていました。その彼らに「人間をとる漁師にしてあげよう」と言われたのです。彼らなりに思いめぐらして、「人間をとる漁師」をイメージしたことでしょう。
- ③従った (1:18) シモンとアンデレは、この招きを受けて、「網を捨て置いて従った」のです。この思い切りの良さは彼らの決断力があつたからでしょうか。いやむしろ、イエス・キリストのご人格に彼らが当然のごとく安心して従わせる何かがあつたからでしょう。ひき寄せられる大きな魅力があつたのでしょう。それはシモンたちからすれば恵みに浴することでした。

3. ヤコブとヨハネ (1章19～20節)

- ①ヤコブとヨハネ イエス・キリストはまた少し行かれると、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネをご覧になりました。ここでも「ご覧」になっています。主の目にとまる何かがあつたのでしょう。ゼベダイはカペナウムにあって何人かの雇い人がいるほど大手の漁師でした。裕福でもあつたでしょう。その子供達も漁師で、主の弟子となっていくヤコブとヨハネでした。
- ②網を繕って 彼らは舟の中で網を繕っていました。漁に出れば、網はほつれるのです。毎回、修繕をしなければならなかったでしょう。いつものように彼らは漁に出るための備えをしていたのです。イエスは彼らの仕事ぶりをご覧になっていたのです。
- ③ついて行った 主は彼らをもお呼びになりました。すると彼らは「父ゼベダイを雇い人たちといっしょに舟に残して、イエスについて行った」のです。要するに、ここでは彼らは家業を捨ててもイエスに従うことにしたのです。そこまでのことをさせるのは何でしょう。やはり主イエスの恵みに満ちた大きな包容力があつたでしょう。

【結論】 1980年春。神学校を出てすぐに行った地は甲府でした。まだ独身でした。右も左もわかりませんでした。その土地もわからず、人々もわからず、伝道も牧会わかりませんでした。その開拓伝道に、私は挫折したといつて良いでしょう。3年目でようやく牧師の資格を得た直後、つまり1983年春に市原に来てすぐの中会会議の開会礼拝でこの箇所から御言葉を語りました。その時「人間をとる漁師」とは、人間が救われるという恵みの出来事に関わらせていただくことだと解釈して伝えました。説教終盤、なぜか涙が止まりませんでした。それから四半世紀たった、2008年11月の中会会議で同じ聖書箇所からまた語りました。その時はもう50代も後半になっていましたが、大きな船に乗ってする漁もあれば、小さな舟でする漁もある。網を使う漁もあれば、一本釣りもある。農業と兼業の漁師もいる。どの漁の場所や条件が良いとか悪いとかではなくて、その漁を喜んですることの大切さを学びつつ伝えたことでした。勇んで従った道でしたが、この心持ちにさせられるまでにずいぶんかかりました。イエス・キリストを信じるということは、必ずしも専門の伝道者になるということではありません。しかし、世の中にあつてキリスト者として生きるために、キリストに従う心が重要です。失敗が多かったキリストの弟子たちとともにこの道を進んでいきましょう。